上信沿線の観光考える

高崎商科大がフォーラム

シンポや事例発表　歴史資源活用を提案

高崎商科大の地域創造フォーラム（上毛新聞社共催）が2日、高崎市根小屋町の同大で開かれた。世界文化遺産候補「富岡製糸場と絹産業遺産群」が6月のユネスコ世界遺産委員会で登録審議されるのを前に、事例発表やシンポジウム「上信線沿線地域の観光まちづくりへの誘い―現状・問題・ビジョン」を通じて、約130人が上信電鉄沿線の観光資源の活用策などを考えた。

シンポジウムは、パネリストに同電鉄の笠原道也社長、高崎里山の会の白石隆夫会長、富岡市世界遺産まちづくり部の高橋修部長を迎え、高橋修・同大短期大学部現代ビジネス学科長がコーディネーターを務めた。

絹産業遺産群の世界遺産登録を見据え、高崎市から下仁田町まで沿線の観光面での課題を探った。パネリストから絹遺産だけでなく、「駅名に『金井沢の碑（国特別史跡）入り口』と加えるなど沿線の歴史を積極的に紹介していったらどうか」といった提案もあった。

フォーラムは、文部科学省の「地（知）の拠点整備事業」に同大が本年度、県内で唯一採択されたのを受け、始動イベントとして開催。市民団体の地域おこし活動などに協力した学生の事例発表もあった。

上信線沿線の観光などについて意見を交わしたシンポジウム

閉会後には、高崎青年会議所主催の世界遺産応援企画「つなげよう！日本のシルクロード」も行われた。

前橋で右島さん

本県の古墳研究の基礎を築いた元群馬大教授、尾崎喜左雄（きさお）さん（故）が2日、前橋市総合福祉会館で開かれた。尾崎さんの教え子で県古墳総合調査指導委員長の右島和夫さんが、恩県が進めていた全県規模の古墳調査の成果をまとめるため、県嘱託職員として本県に赴任。文献による古代史の[illegible]

養蚕保護へ　桑植樹

前橋　絹製品関係者、農家で

Silk Country Gunma 21

養蚕農家を応援しようと、桑苗の植樹プロジェクトが2日、前橋市小坂子町の糸井文雄さんの畑で行われ、県内外のデパートや呉服店などの関係者が参加した。純国産絹製品を手掛ける日本蚕糸絹業開発協同組合（小林幸夫理事長）の恒例企画で、参加者は苗木が順調に育つことを願った。

植樹を前に、小林理事長は「県内農家の生き残りのためにも誇るべき純国産の絹製品をしっかりと消費者に届けたい」とあいさつした。

あいにくの雨模様だったため、本格的な植え付け作業は中止。関西や九州などから集まった18社の21人は長靴に履き替え、約300平方㍍の畑で桑の苗木を持って記念撮影した。

糸井さんは「しっかりと生育を見守り、管理していく」と約束した。今後、この畑で約400本の苗を育てる。

同組合は養蚕農家の支援を目的に、2012年からプロジェクトを始め、3回目。過去2回は安中市松井田町で植樹してきた。組合の販売部門を担う絹小沢の社員も参加した。

畑に桑の苗木を植え込む関係者

大雪被害の農家支援

ハウスなど片付ける

高崎市とJA職員

2月中旬の大雪で被害にあった農家を支援しようと、JAたかさきと高崎市の職員計260人が2日、市内各所に出向き、ビニールハウスなど農業用施設の片付け作業を手伝った。

高齢などを理由に自力の撤去が難しい農家への支援策で、同JAは174人、市は86人がビニールシートをはがしたり、たたんでまとめる作業をした。

市によると、今回の大雪で市内にあるビニールハウスの約9割に当たる700棟程度が倒壊したという。

市は3日から「農業施設[illegible]

ビニールシートを撤去する高崎市の職員ら